

今とあしたが見えてくる— 冷食・チルド・惣菜業界の専門誌

月刊低温流通 **4** 2013

13年春

新製品 傾向分析

業界人^{ひと}インタビュー

キューピー FS本部長 斎藤 謙吾氏

13年上期 広告・キャンペーン

アクリ くまちゃん占い
10億カップ達成!

日台冷凍農産品貿易懇談会

台湾枝豆、生産増と品種開発でさらに輸出拡大

冷凍枝豆の対日輸出量で5年連続トップの座にある台湾が、2013年も生産を増大するとともに、品種開発を進めて存在感を増しそうである。台湾区冷凍蔬果工業同業公会（蔡敬慮理事長）と台湾貿易センター東京事務所（陳英顯所長）が、FOODEX JAPAN 2013（幕張メッセ）開催中の3月7日に輸入冷凍野菜品質安全協議会（凍菜協、大内山俊樹会長＝ニチレイフーズ常務執行役員）のメンバー等を開催して「2013年日台冷凍農産品貿易懇談会」を開催。今年春作は作付面積を大幅に拡大し、製品は前年比約5割増の2万7000tを生産することなどを明らかにした。懇談会と台湾枝豆の展望を紹介する。



活発な意見交換を行った懇談会

春作は製品5割増2万7000t

蔡理事長は懇談会のあいさつで円安が対日輸出に与える影響を懸念しながらも、枝豆を差別化し中国、タイ、インドネシアなどとの競争に勝ち抜く決意を語った。「優良品種の開発を促進し、ハーベスターの改良による収穫効率のアップを図る。体系的な自営農場の拡大と管理強化を推進する。これにより一層安全・安心な商品作りを目指す」と強調した。

凍菜協を代表して佐藤勝彦副会長（ノースイ冷食品質管理部長）は「12年の日本の台湾産冷凍野菜輸入量は、7.2%増3万3000tだった。行政院農業委員会の指導と台湾蔬果同業公会の尽力の賜物である。懇談会における情報交換と交流も有益であり、昨年11月に高雄で開催された懇談会では、大規模農場と大型機械による収穫、さらに衛生的な工場での生産を視察させていただいた。この取り組みが大幅な輸出増につながった。先般各国の冷凍コーンの試食会に参加、従来は米国産が常に高い評価を得ていたが、今回は台湾産が米国産と同等、もしくはそれ以上の評価だった。枝豆、ほうれん草とも台湾の生産技術は向上している。さらに

開発を進め貿易を拡大して欲しい」と述べた。



蔡理事長



佐藤副会長

日本は円安でコスト削減を提案

冷凍農産品輸入協議会の会長会社である日本水産の山崎康正執行役員は「日本の12年冷凍野菜輸入量は、6%増の95万4000tと過去最高となった。このことは、需要はまだ強まり凍菜がこれからも成長産業であることを示している。台湾産枝豆も10%増3万100tとなり、1994年以来18年振りに3万tを突破した。中国産は10%減となり、タイ産は4%増だが頭打ちである」と台湾産に強い期待を示した。

さらに為替問題に触れ、「年末から

の円安ドル高により日本における輸入食品を取り巻く環境は悪化し、価格アップは緊急の課題となっている。しかし90年以来約20年間デフレに慣れた日本の消費者相手に、値上げをすることは容易ではない。台湾側も最低賃金の上昇などコストアップで経営は厳しい。そこで今後の鍵は台湾側のコストダウンと考える。例えば同業公会が肥料、農薬を一括購入し、資材のコストダウンをすることも一方法と思う。また、日本の輸入関税の低減を視野に入れることも考えられる」とコスト削減策を提案した。

このあと同業公会は、冷凍枝豆類小組召集人の魏健一氏が「枝豆・ほうれん草・スイートコーンの生産・供給状況」を報告した。

それによると13年の春作枝豆の作付け面積は、前年を57%上回る5000haへと大幅に増やす。農業委員会はずでに高雄市での懇談会で、台湾の食料自給率アップのために、これまでの稲作休耕政策を見直し、休耕田転作を行うことを説明していた。そのときに、「枝豆等」の年度別目標として13年は4000ha、16年に6500haとしてい



魏召集人



山崎執行役員

た。今回の報告はそれを上回るペースで面積を広げようとしていることがうかがえる。

2013年 台湾産冷凍野菜の生産予想

(面積ha、数量t、カッコ内は12年)

	作付け面積	製品数量
枝豆(春作)	5,000(3,189)	27,000
ほうれん草	150(180)	2,400
スイートコーン	162(120)	500

台湾産冷凍野菜の対日輸出量の推移

(数量t、丸数字は日本での順位)

	10年	11年	12年
枝豆	① 24,616	① 27,348	① 30,103
ほうれん草	② 1,644	② 2,351	② 1,731
スイートコーン	⑤ 343	⑤ 320	⑤ 554

その春作枝豆の生産予想は製品にして2万7000tとしている。近年の春作の生産量は、10年1万3500t、11年1万5000t、12年1万8200tと推移しており、近年最高の12年を48%も上回る。秋作が12年並(約1万2000t)とすれば、13年は4万t近い製品生産が行われることになる。いかに台湾側が強気になっているかが分かる。中国産枝豆の昨年対日輸出量が10%減1万8800tにとどまっており、このことも強気の背景の一つと見られる。

ほうれん草の作付面積は17%減の150ha。製品生産は2400tの予想。

近年の対日輸出量は常に中国に次いで2位の座にある。中国との数量の差は大きい、日本市場で一定の評価があることが分かる。

スイートコーンは35%増の162haの耕作地で栽培する。製品の生産予想は500t。スイートコーンの対日輸出量は、去年は前年より急増し554tになった。最大の米国とタイ、NZ、中国が常に上位4ヶ国を形成し、台湾はその次の5位を維持している。常に千数百tを輸出し4位の位置にある中国との差は大きい、いかに中国産を追うか注目される。

新品種の高雄11号・12号を育成 農業改良場の黄場長が講演

農業委員会高雄区農業改良場の黄徳昌場長は「台湾新品種枝豆の紹介及び産業の発展」と題して講演した。

台湾枝豆の主力品種は「高雄9号」で、12年の作付面積は全体の71%と生産量の大部分を占める。次が「高雄8号」の6%である。当然対日輸出量は「9号」がほとんどを占める。台湾は農産物の知的財産権を重要視しており、このほど「9号」の品種権を日本の農林水産省に登録した。

黄氏は「つい3週間前に『9号』の品種権を登録し25年間の権利を獲得した。これで台湾枝豆は6~9号などの品種を登

録したことになり、権利の保護を図る上で有益」と強調した。さらに黄氏は、国際市場での競争力を高めるため新品種の育成に尽力していると語った。大きくて深い緑色の莢(さや)で量産が可能であり、食感・味ともに良質のものを目指している。また、機械による収穫に適し、冷凍加工が可能で輸出向けに採用することも目標としている。

ほのかな芋の香り「香蜜」をアピール

その新品種の代表例が「高雄11号(香蜜)」である。ほのかな芋の香り



黄場長

がする茶豆系で、昨年11月に台湾で品種権を取得した。黄氏は「莢が大きく100莢当たりの重量は325~344gある。莢の位置も高く機械収穫に適している。1ha当たりの検品合格収穫量は8~10t。日本の消費者にも、

このほのかな芋の香りと美味しさを味わって欲しい」とアピール。

最新の品種「高雄12号(緑翡翠)」も紹介し、「1つに3~4粒入った莢が多く見られ、粒は丸く大きい。食感・味ともに良質で、枝豆及び大豆両用の品種である」と説明した。

ニチレイフーズの丸山雅章執行役員が「台湾の品種改良への取り組みに感銘した。付加価値を付けた新品種に期待したい」などと語り懇談会を締め括った。



丸山執行役員



劉前理事長

懇親会では同業公会前理事長の劉貴坪氏が「円安で輸出は厳しさが増すが、機械化を推進することで乗り切りたい。日本との間でFTAを締結することも一つの解決策」と語るなど、意見を交換しながら懇親を深めた。

第一生命の永濱氏語る

第一生命研究所首席エコノミストの永濱利廣氏は「少子高齢化による消費構造の変化~15年までは高齢化、20年以降は少子化~」と題して講演。永濱氏は「2010~15年は団塊の世代が60才台後半になり労働市場から撤退し、65~74才の世代が社会保障で支えられる高齢化社会となる。その後の20~25年は団塊ジュニアが50才台となり、その一方で30才台の若年世代が収斂し、少子化が顕著になる」と指摘。これによる食料費などの分野における消費構造の変化を説明し、少子化は消費にとって負の影響が考えられると語った。その一方で「60才以上のシニア人口は2040年まで増え続ける。それに対応した的確なサービスをすれば消費の活性化も期待される」などと語った。



永濱氏

シニア対応で
消費活性化を